



品種および作型によるネギ黄色斑紋病斑の発生回避法の検討

新潟県農業総合研究所 園芸研究センター ^{きし}岸 ^{こうじ}孝二・^{くろだ}黒田 ^{ともひさ}智久・^{たざき}田崎 ^{よしたか}義孝*

はじめに

新潟県でのネギ栽培は、県北部の下越地方で昭和40年代前半から本格的に始まり、日本海沿岸砂丘地帯を中心に600ha余りで行われている（農林水産省，2020）。新潟県における主要な作型は、1月播種・4月定植・8～9月収穫の夏ネギと、2～3月播種・4～5月定植・10～12月収穫の秋冬ネギである。このうち秋冬ネギの栽培面積は2019年時点で454haとなっている（農林水産省，2020）。ネギは、近年、安定した需要が見込めることもあり、本県の重点品目として生産振興が図られている。

ところが新潟県や東日本の主産県では、出荷部位の中心葉3枚に黄色モザイク状の斑紋病斑（図-1）が発生し問題となっている（三澤，2008a；守川ら，2013；齋藤・藤井，2017；千葉，2017）。この病斑は外観品質を著し



図-1 中心葉に出現した黄色斑紋病斑

Evaluation of the Effects of Cultivars and Cropping Periods on the Occurrence of Yellow Mottle Symptoms Caused by Welsh Onion Leaf blight. By Koji KISHI, Tomohisa KURODA and Yoshitaka TAZAKI

（キーワード：長ネギ，品種間差，ロジスティック回帰）

*現所属：新潟県農業総合研究所基盤研究部

く損なうため、出荷等級を下げる原因の一つとなっている。また激発した場合は出荷停止などの措置が取られ、生産者の経営に大きな打撃を与えている。

三澤（2008a）は、それまで生理障害やアザミウマ類による被害と誤認されてきた斑紋病斑について、ネギ葉枯病菌によるものであると報告し、黄色斑紋病斑と呼ぶことを提案した。本病菌では葉先に生じる先枯れ病斑、葉身中心部に生じる斑点病斑、および黄色斑紋病斑の三つの発病形態があり、先枯れ病斑や斑点病斑は生理的な葉先枯れやべと病等で枯死した組織に二次的に葉枯病菌が感染し形成される。一方、黄色斑紋病斑はこれらの病斑で作られた分生子が、中心葉に感染することで形成される（三澤，2012）。

さらに三澤（2012）は、黄色斑紋病斑に対するネギの反応に品種間差異を認め、‘北の匠’、‘元蔵’、‘白羽一本太’、‘秀雅’では、‘白羽一本太’と‘秀雅’の発病度が低かったことを報告している。また齋藤・藤井（2017）は、秋田県では9月下旬以降、段階的に黄色斑紋病斑が増加するとし、同様の事例は宮城県（千葉，2017）や富山県（守川ら，2013）でも報告されている。筆者らは、主に耕種的防除による黄色斑紋病斑の発生抑制を目的として、新潟県における秋冬ネギ品種および作型について、その発生差異を検討したので報告する。なお、本稿の内容はすでに公表したものを再構成したものである（岸ら，2020）。

I 品種が黄色斑紋病斑の発病に与える影響

三澤（2012）は、北海道北斗市内の現地圃場で30品種・系統の黄色斑紋病斑の発病を調査し、品種ごとに発病程度に差があることを認めた。そこで、新潟県内で栽培されている主要な秋冬ネギ品種について、2018と2019年に黄色斑紋病斑発病の品種間差を調査した。供試品種は、現地で秋冬ネギとして一般的に栽培されている‘夏扇4号’を標準品種として、加えて‘夏扇パワー’、‘関羽一本太’、‘夏山一本太’、‘源翠’、‘群翠’、‘秀雅’の7品種とした。本県砂丘地における慣行の病害虫防除では、殺菌剤と殺虫剤を定植後から月2回程度、収穫1か月前か